

緑 ネット通信

No.69

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は「みどり」、特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携し、その輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

秋の花に逢いに・・・出かけてみませんか？「ヒガンバナ」「フジバカマ」コース

新型コロナ対応で再発見ツアーもオープンフォレストも中止になってしまいましたが、ご家族やお友達と少人数で自然のみどりに癒しを求めて歩いてみませんか？見ごろをむかえるヒガンバナとフジバカマを訪ねるコースをご紹介します。



ヒガンバナ咲く里山風景と森をつなぐコース

新京成常盤平駅北口～祖光院～金ケ作自然公園

- ① ～立切の森・三吉の森を経て五香方面
- ② ～囲いやまの森～育苗圃ハーブ園～野中の森

常盤平駅の北側、金ケ作地区はみどりの多いエリアです。かつてはマツやクヌギの林が多く、金ケ作の炭は江戸に送られる松戸の名産品だったそうです。駅から徒歩10分の祖光院の林の下に咲く一面のヒガンバナは風情があり、道を挟んで向かい側の金ケ作自然公園はオオタカも来る公園です。ここからは①東に進めば立切の森・三吉の森が、②西に進めば囲いやまの森・金ケ作育苗圃ハーブ園・金ケ作野中の森が、駅に戻る途中には地区の鎮守社である熊野神社の緑がつながっています。下線付きの民有林はボランティアが整備活動をしており、普段は立ち入れませんが、森に囲まれたエリアは街中より気温もやや低めだそうで、この時期のお散歩にお勧めです。

秋の七草 フジバカマ を目指すコース

北総線矢切駅～栗山浄水場～柳原水門～フジバカマの里～里見公園

栗山浄水場を半周すると斜面林を下る小径があります。

常磐線で東京から松戸に帰ってくる時に目に飛び込む緑の帯の松戸市南端に当たるところです。坂を下り本久寺を抜けて江戸川堤防に向かうと、坂川が合流する柳原水門があります。堤防を南へ、堤防が不自然にカーブして旧坂川跡を渡った先の土手下にフジバカマを保護したエリア「フジバカマの里」があります。日蔭の少ないエリアですが、秋の野草が迎えてくれます。斜面の緑を上がれば歴史ある里見公園(市川市)。帰路は県道に出てバス(松戸⇄市川)が本数も多く便利でしょう。



拝見！ とんりの里山活動 【市川市編】

緑のネットワーク・まつど 高橋 盛男

市民ボランティアによる里山活動（樹林地の保全活動）、松戸の近隣市ではどうなっているのか。ちょっと訪ねてみましょう。今回は市川市の里山活動です。

ふたつのルートによるスタート

市川市の里山活動は、2006年に始まります。この年に「わんぱくの森の会」が活動を始め、一方で市の主催する「緑と花の市民大学」が開校されました。

「わんぱくの森」の活動は、松戸の里山活動と深く関わっています。前年(里やま応援団 1 期の活動が始まった翌年)、市川で開かれたシンポジウムで、松戸の取り組みを知った市川みどり会(山林所有者の会)の役員が、当時の里やま応援団代表・深野靖明さんや、溜ノ上レディースの渋谷孝子さんの提案に共鳴し、所有する山林をフィールドとして提供した経緯があるからです。同じく民有林の「大町教育の森」の活動も、続いてスタートします。

一方の「緑と花の市民大学」は、緑の担い手づくりを目的とする講座です。内容は非常に重厚で、基礎講座だけでも 11 回。その後も座学研修や技術講習を伴う演習を繰り返し、フィールドに入るまでにかかる期間は延べ 2 カ年におよんだとか。全 5 回、1 カ月ほどで終わる松戸の里やまボランティア講座とは大違いです。

ただ、当時をよく知る大峯章禧男さん(わんぱくの森の会・現代表)によると、この市民大学は「修了生が市の所有する樹林地で活動することを前提としていた」そうです。つまり、市川の里山活動は、市川みどり会由来の



ゆうゆう里山会の植村さん。柏井町 2 丁目緑地にて

民有林対象と、市民大学由来の市有林対象というふたつのルートを持っていることになります。

交流会の発足で市内の活動がネットワーク化

「緑と花の市民大学」は 5 期まで続き、6 期以降は規模を縮小し「緑を守るボランティア入門講座」などの名称で「(公財)市川緑と花のまちづくり財団」に引き継がれています。現在の里山活動団体数は 9 団体。前述したように主な活動の場は市有林ですが「近年は、周囲の山林所有者の要望で、民有林の整備を併せて行っている団体もある」(大峯さん)とのことでした。

いちかわ市民キャンプ場を擁する柏井町 2 丁目緑地。そのうち約 2ha を管理している「ゆうゆう里山会」の代表・植村敦子さんは、市民大学の 2 期生。「難しい内容もあったけれど、里山管理の理念をしっかりと学べたのがよかった」と講座をふり返ります。

2012 年には団体間の情報交流を図るための「いちかわ森の交流会」が発足。現在では月に 1 度の定例会を開き、活動のネットワーク化を進める一方「財団主体だった入門講座を、昨年からは里山ボランティア主体に転換した」とも。行政主導的な色合いが濃かった市川の里山活動が徐々に変わりつつあると言います。

活動者の高齢化と、講座受講者の減少などの課題はあるものの、植村さん自身は活動に入って森の好きな仲間が増え、森林インストラクターの認証を取得するなど、得るものが大きかった様子。「人生で今が一番楽しい」「家より、森にいるほうが好き」と笑顔を見せます。その言葉に、森の恵みの奥深さが感じられます。



わんぱくの森(大町)の作業風景

東葛地域で初のナラ枯れ

ナラ枯れ被害対策の講習会開催

藤田 隆

7月30日、10時から松戸市高塚・甚左衛門の森でカシノナガキクイムシ（以下＝カシナガ）によるナラ枯れの講習会が開かれた。講師は千葉県農林総合研究センター森林研究所の福原一成上席研究員。松戸里やま応援団の野口代表の呼びかけで、ほぼすべての森からの参加があったほか、森林研究所福島主任上席研究員と県農政部幸氏、松戸市みどりと花の課と農政課の3名、計31人が集まった。

最初に野口代表が講習会開催の経緯を説明した。今年7月5日に紙敷石みやの森でカシナガによると思われる被害がコナラで見つかり、サンプル調査の結果カシナガを確認した。市内の各森で確認調査をすすめたところカシナガによると思われる被害が相次いで見つかったため森林研究所に講習会を依頼したとのこと。



マスク姿で講習会(右端＝福原上席研究員)

ナラ枯れ被害を受ける樹木は主にミズナラ、コナラ、シイ、カシ類である。講習会は福原氏の講義に続き、被害木の確認、防除法について話し合いがもたれ、カシナガの被害木を観察し、カシナガをとらえるトラップ（仕掛け）の実演を行った。午後はしんやまの森、囲いやまの森、三吉の森を調査した。以下講演の概要。

県内では4年前に鴨川で発見

千葉県では2017年8月に鴨川市のマテバシイ林でカシナガによるナラ枯れが見つかり、同年館山市、南房総市など70か所で広がっていることが分かった。2019年には千葉市、船橋市に北上し、今年は柏市、市川市、印西市、成田市、東庄町、山武市で調査を行ったところ、印西市、柏市においてカシナガが大量に捕獲されたが、ナラ枯れ被害は見られず、紙敷石みやの森が東葛地域での最初の事例だ。

ナラ枯れの原因

ナラ枯れの原因はカシナガの雌が孔（直径2mm）をあけて樹木内に入り、雌が持っている菌嚢（のう）（ナラ菌や幼虫の餌となる酵母菌等を蓄える器官）も同時に樹木内に入る。樹木はカシナガを排除しようとして、樹液を出し、フェノール類などの様々な物質を材の細胞内に沈着させる。これらの防御物質は、樹木自体にもダメージを与え組織は壊死する。

壊死した組織が樹幹の通水機能を失わせ、葉に栄養がいかなくなって枯れる。



A4クリアファイル利用のトラップをかける

カシナガは樹幹の壊死部分にある孔道の壁にアンブロシア菌という酵母の仲間の菌を繁殖させ、幼虫はそれを食べて育つ。幼虫は翌年の5月頃まで幼虫のまま育ち、その後蛹になって6～7月頃成虫になって飛び立って他のコナラ類に穿入する。

県内のナラ枯れの状況

西日本から北上してきた可能性。カシナガの飛翔距離は長くて1km程度。長距離の移動には風の力が要するため、台風によって広く拡散した可能性もある。

カシナガの防除方法を7つ紹介する。①樹木にラップを巻いて出てきたカシナガをとらえる。②秋に木の中に幼虫がいるので伐倒、破碎、燃焼処理。③薪にして来年6月までに処分する。④切った材をごみ袋に閉じ込めるとカシナガが飛び出す。⑤被害木を燻蒸処理。⑥薬剤注入処理。⑦静岡県考案のA4クリアファイルを使ったトラップで捕獲。

講習会後の8月3日には里やま応援団でA4クリアファイル600枚をトラップに仕立てる作業が行われ、各森にトラップを仕掛けた。15の森からカシナガ被害の報告が上がっている。

緑のネットワーク情報

6月30日(火) 七夕プロジェクト



秋山の森で七夕飾りに使うマダケを切り出し、放課後児童クラブ30か所に配布した。今回、コロナ対策で市職員対応難のこともあり、市のトラックのほか応援団から軽トラックが出動した。竹の切り出しには応援団18名とみどりと花の課4名の22名が参加した。

後日、児童クラブから短冊で飾られた竹の写真が届いた。お礼の手紙には子どもたち、保護者の喜ぶ様子に加え「来年も欲しい」の願い事も記されていた。

7月13日(月) ヤマユリ観賞会



芋の作の森でヤマユリ観賞会が行われた。森の会員が丹精込めた大輪は、長めの梅雨が開花に影響したのか、平年に比べ少ない目となった。この日も曇天で時折雨がぱらついた。観賞会に訪れたお客さんは数名だが、積み重ねの努力が実を結ぶこの時期が最高にうれしいそうだ。

7月18日&25日(土) ビッグショット製作講習会

伐倒技術の一つであるスローライン投擲に必要なビッグショットを手作りする講習会が4組ずつ2日に分けて行われた。講師役の野口さんが部材を調達し、揃った部品の穴あけ、ボルト締め、サンドかけを着々と進めた。当日は土砂降りで、ブルーシートで雨を除けて製作した。後日談によると、難易度の高いゴムひもの三つ編みが一番苦労したとのこと。それぞれの森の活動日にはスローラインを飛ばして、勢いを確認したとのこと。

～しぜんのコラム 45～

キマダラカメムシ

最近気になる生き物は、外来種のキマダラカメムシ。台湾～東南アジア原産の大型のカメムシで、九州から北上しながら分布を広げている。たとえば愛知県では2011年に確認されているが、なぜか東京では愛知よりも早い2008年。東京のキマダラカメムシは、中部地方を飛び越えて、人為的に侵入したらしい。東京では今や、キマダラカメムシは最も普通に見られるカメムシとなっているようである。

松戸では、昨年あたりから見かけるようになってきたが、今年の夏は多い。そこで、自宅近くの桜通りで、キマダラカメムシの生息状況を調べてみた。

調査したのは8月26日の早朝。小金原5丁目、桜通りのソメイヨシノ64本を目視で調べた。その結果、64本中の49本(77%)に148頭のキマダラカメムシを確認。42本(66%)では幼虫95頭が認められた。目視だから、実際はもっといるのだろう。来年は、もっと増えているだろう。



キマダラカメムシ(左:終齢幼虫, 右:成虫 2020.8.24 松戸市小金原)

「千葉県外来生物リスト2020年改定版」では、キマダラカメムシの生態系や人に対する影響度はCランクで、防除の緊急性もCランクとされている。しかし、新たな外来種の分布拡大は、それまでに分布していた在来種の減少をひきおこす。今後も継続して注視していきたい。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー-52(観察学習会 71)

「松戸の秘境・千駄堀～秋の森を訪ねる」

松戸市の真ん中に、こんなところが?!と驚くような緑の多い千駄堀地区。森の中でじっくりと樹木・野草・森の生き物たちと向き合い、身近なみどりを楽しみましょう。

10月21日(水) 9:30~12:30 (小雨実施) 参加費300円(会員は100円)
 集合 新京成線 八柱駅 改札口 9:30集合 持ち物 マスク、飲み物、雨具、記入済み参加表
 問い合わせ 090-2935-9444 (高橋) その他 歩きやすい服装でどうぞ

新型コロナのため中止になる場合があります